

## 非人間主義の哲学

——ピエール・モンテペロの仕事をめぐる——

鈴木 泉

### 一 非人間主義の哲学へ向けて

かつて、ミシェル・フーコーが『言葉と物』の末尾で述べた「人間は波打ちぎわの砂の顔のように消滅するだろう<sup>(1)</sup>」という言葉が、人口に膾炙した時代があった。この言葉は、ヨーロッパにおいて一八世紀末頃に形成された、人文科学の対象としての人間なる形象が、一八世紀末という特定の時代において形成されたものである限り、人文科学を生み出した知の基本的配置が新たな変化を被り、人間科学の可能性の地盤がくつがえされることによって、人間という形象そのものもまた早晩消滅する、という思想史に関するフーコーなりの分析<sup>II</sup> 考古学の結果として示された断言であった。この書において分析されたかなり限定された意味を有する人間なる形象の意味について説明することや、このようなフーコーの分析<sup>II</sup> 考古学の思想史としての正当性の有無について議論することは、重要な課題だが、その作業は本稿の課題ではない。ここで改めて強調しておきたいの

は、この断言に示されている主張が、少なくとも或る時期のフランス哲学の一定の哲学者・思想家において、共有されていた考えであり、そこには今なお重要な意味が存すると私は考えるが、その最良の部分がいつの間にか忘却にさらされつつある、というそのことである。

構造主義やポスト構造主義として括られるフランスの一群の哲学者・思想家たちは、そこに様々なニュアンスの違いや分析の観点の違いはあるにしても、フーコーの断言と一つの点において共鳴する。すなわち、非人間主義という一点である。ごく簡単に振り返るが、たとえば、アルチュセールは、歴史というものをヘーゲルの考えるような、絶対精神の絶対的な生成の過程ではなく、「主体なき過程」と呼ぶところの合理的な過程として捉え、抽象的な人間主義<sup>(1)</sup>とヒューマニズムを想像的な構築物に他ならないイデオロギーとして批判的に位置づけ、それに対して「理論的なアンチ・ヒューマニズム<sup>(2)</sup>」を唱えた。アルチュセールにも大きな影響を与えたラカンもまた、精神分析を心理主義的な傾向から免れさせて、想像的な統一体としての自我と主体とを区別し、主体が言語活動の偶然的な法則と欲望の対象の歴史とに依存していることを明らかにして、人間的な主体がそれによって維持されるような抽象的な規範の存在を否定する。「人間存在の真の中心はもはや人間主義の伝統によってあてがわれていた場所にはない<sup>(3)</sup>」のである。デリダが、「人間の終焉」目的<sup>(4)</sup>なる名高い講演を残していることも指摘しておこう。いずれにせよ、抽象的な人間の本質なるものを指定し、そのようにして措定された人間を中心にして思考することを拒否するのである。このような思考を非人間主義<sup>(5)</sup>(inhumanisme)と呼ぶことにしよう。これをリュック・フェリーとアラン・ルノーのように、反人間主義<sup>(6)</sup>アンチ・ヒューマニズム<sup>(7)</sup>(anti-humanisme)と呼ばれるのは、そのような呼称を選択するや否や、非人間主義ないしは反人間主義は人間主義と二項対立的な対立関係のもとで捉えられてしまうことによって、その真の射程が逸せられてしまうからである。フェリー&ルノーが「六八年の思想」と呼ぶものを貫通する非人間主義とは、たとえば人間

に対する尊厳を否定したり、人間を何らかのシステムの一駒として捉えることによって人間存在の価値を貶める体ものではない。そうではなく、人間が、自然や社会、或いは言語活動や知の配置といった様々なシステムによって生み出されものに過ぎないという事実を確認し、そのことによって人間が自律的なものではないことを強調しつつ、人間が産出された結果⇨効果に過ぎないということを反転させて、結果⇨効果としての人間を人間という閉じられた枠組みの中に閉じ込めるのではなく、一つの結果⇨効果であるからには、限定された存在のありようとしての人間とは異なる他のありようへと変容していくことの可能性を肯定すること、ここに非人間主義の哲学の核心がある。人間の自律性への批判のみならず、人間が人間として閉じられた仕方での何らかのあり方へと変容することを禁じる思考への批判こそがその核心である。そのような意味において、反人間主義⇨アンチ・ヒューマニズムではなく、非人間主義という呼称を選択することにした。それは、人間に敵対するのではなく、人間を形成してきた力、つまりは人間の中に眠っていた力を肯定するのだから、非人間主義的ではあっても、反人間主義⇨アンチ・ヒューマニズムではないのである。この点を最も的確に語っているのは、フーコーの盟友でもあったドゥルーズである。冒頭のフーコーの一文を引き延ばすドゥルーズの言葉を、少し長くなるが引用しよう。

フーコーの一般原理とは、どんな形態も様々な力関係の組み合わせである、ということだ。だから、私たちはまず、問題となっている様々な力について、それらの力がどんな外の力と関係しているか、その結果どんな形態が出現するか、と問うであろう。仮に人間における力を考えてみよう。想像し、思い出し、理解し、意志する力など……このような力は、既に人間を前提しているのではないか、という反論があるに違いない。しかし、形態としての人間というなら正しくない。人間における様々な力は、ただ場所と、作用

点、存在者のある地点を前提とするだけである。同じように、動物における力（移動性、被刺激性……）は、あらかじめどんな限定された形態も前提としない。人間のなかの力が、一定の歴史的形成において、他のどんな力と関係し、この力の組み合わせからどんな形態が生じるかを知ることが大切である。私たちはもう予感できるはずである。人間における様々な力は、必ずしも〈人間〉という一つの形態をもつ組み合わせの中に収まってしまうのではなく、別の仕方でも、他の組み合わせに、他の形態に投入されることもありえることを。ある短い時期を考えてみても、〈人間〉は常に存在したのではなく、いつまでも存在するわけでもない。〈人間〉という形態が現れ描かれるには、人間における様々な力が、外にあるとても特別な、様々な力と関係しなくてはならないのである<sup>6</sup>。

ここには非人間主義の哲学の核心が明晰な言葉でもって示されている。「付記——人間の死と超人について」と題されたこの小論において、さらにドゥルーズは、フーコーの分析を辿りながら、「古典主義時代」において、人間における様々な力が、外の様々な力とどのような関係に入っていたのか、次いで、一八世紀末以来において、人間における様々な力が、生命・労働・言語という新しい外の力、有限な力とどのような関係に入っていたのか、そして最後に「未来の形成」について語る。その詳細を追う余裕はないが、次のように述べていることだけを確認しておきたい。

もし、人間における力が、外の力と関係して初めて形態を合成することができるなら、今それはどんな新しい力と関係する可能性があり、そこから、神でも人間でもないどんな新しい形態が出てきうるだろうか。ニーチェは「超人」と言いながら、このような問いの状況を正しく示したのである。「……」ニーチ

エは言っていた。人間は生を監禁した。超人は、人間自身における生を解放して、別の形態を与えようとするものである。「……」フーコーが言うであろうように、超人は、決して存在する人間の消滅などではなく、しかも一つの概念の変化よりはるかに重大なものである。それは、〈神〉でも人間でもない新しい形態の到来であり、私たちは、この形態が、前の二つの形態に比べて、もつと劣悪ではないことを希望することができる。<sup>(7)</sup>

神でも人間でもない新しい形態が実際にどのようなものであるのかを予測することは難しい。それを予感的に指示していたニーチェの超人が、どのようなものであるのか示すことは難しい。フーコーが冒頭に挙げた一文の直前において、「私たちがせめてその可能性くらいは予感できるにしても、さしあたってなおその形態も約束も認識していない何らかの出来事によって、知の基本的配置が一八世紀の曲がり角で古典主義的思考の地盤がそうなったようにくつがえされるとすれば<sup>(8)</sup>」と、人間の消滅の条件を述べているように、新たな形態の出現は予測不可能な出来事によってのみ可能になるのだから、それを予測しようとしても、人間という形態の延長線上において捉えるのが関の山で、真に新たな形態を捉えることは難しいし、また、それは大方漫画的なもの（超人Ⅱスーパーマン？）になってしまっただろう。だから、私たちに思考可能なこと、そして思考しなければならぬことは、人間を形成してきた力の肯定と人間の他の形態への変容可能性、という非人間主義の二つの論点に他ならない。

しかしながら、このような非人間主義の哲学の核心は、いつの間にか忘れ去られようとしているように思う。杞憂であることを強く願うが、たとえば生命倫理学やケア倫理学の言説一般において、人間という価値に対する疑いが真剣な考察の対象となったことがあるだろうか。生命科学一般の爆発的な進展を前にして、臓器移植

問題にしる着床前診断問題にしるエンハンスメント問題にしる、人間という形象の存在の自明性を疑うことなく、人間という形象を盾にした防衛的な思考が一般的であることは否めないだろう。或いは、死という絶対的な事実や、癌といったとりわけでも苦しみを伴う病を前にして、人間の尊厳という概念それ自体が思考の最終的な準拠軸になるという傾向も否めないであろう。人間の尊厳という概念が、それに対する真摯な考察がどれだけ繰り広げられようとも、根本的に批判的な検討の対象となったことがあるだろうか。<sup>9)</sup>敢えて言うが、それらは余りに人間的であるように思われるのである。生命倫理学やケア倫理学が、哲学的な深度をもったものとなるためには、人間という形象や人間の尊厳という概念が、歴史的な形成物に過ぎず、人間は他の形象へと変容可能なものであるし、人間の尊厳は自明視できるような概念ではない、という非人間主義的な思考との対質を必ずや要請するはずである。

私自身は不案内な事柄に対しての物言いはここでは慎んで、非人間主義の哲学そのものについての議論に戻ろう。私の見るところで、非人間主義のバイブルとでも言うべき書物は、上に引用したドゥルーズがガタリと共に執筆した『千のプラトー』に他ならない。人間を形成してきた力、つまりは人間の中に眠っていた力を肯定して、人間という形象を出来上がったものとせず、その発生と消滅を辿り、ひいては、人間とは異なる形象へと私たちを開いていくこと、ドゥルーズ哲学の核心にはこの問いがある。この問いを比喻としてではなく文字通りのものとして受けとめて考え抜くことを文字通り実践したのが、ドゥルーズ&ガタリの『千のプラトー』である。精神分析批判を遂行しつつ壮大な世界史を展開する『アンチ・オイディプス』は、機械論と生気論との二元的対立の手前において、構造的統一性が解体された機械と有機体統一を失った生体とが共存するような次元を全面に打ち出すが、人間という形象は欲望する機械の運動の中に解消されてしまうのであるから、まさしく非人間主義の哲学のマニフェストであった。だが、『千のプラトー』は、欲望を構成するより微細な

次元にまで分析を広げるとともに、分子生物学から言語学、地質学から国家論、音楽論・文学論・絵画論等々と、宇宙論的な規模の素材を取り上げて、様々な多様性を実在とすることによって分析の素材を一挙に広げ、それぞれにふさわしい概念群を次々と創出することによって、非人間主義の哲学を壮大な規模において文字通り繰り広げたのである。(女性・子供・動物・植物・鉱物等々への)生成変化、モル状／分子状、逃走線＝漏水線といった概念や言語学の公準に対する批判、人間的な顔の形成と主体化に対する議論等々はその一例である。

だが、ドゥルーズ&ガタリの『千のプラトール』は、伝統的な哲学が基本的には人間主義の哲学に絡め取られているが故に、非人間主義の哲学を展開するために伝統的な哲学の概念を用いることが少なく、次々と新奇な概念を創出することになり、また、問題設定から解答ないしはアポリアの提示に至る通常の哲学書の形態とは異なり、各プラトールが、統一する中心を欠いたまま互いに連結し、様々な領域に開かれ、固定した意味から逃れて実験的な地図を作製することを実践しているので、最低限の理解すら一般には困難で、それがともに検討の対象とされることは殆どなかった。非人間主義の哲学は、スローガンとしてはそれなりに理解されても、その内実が検討の対象とされることは少なかったのである。

## 一 「いかに自然を思考するか？」の意義とモンテペロの思索をめぐって

さて、『死生学研究』本号に拙訳を掲載したピエール・モンテペロ教授の論考は、このような欠を埋めて、ドゥルーズ&ガタリの非人間主義の哲学への最良の導入の役割を果たすものである。以下、モンテペロ教授の論考「いかに自然を思考するか？」の意義について簡単に論じる。

かつて、私は『千のプラトール』の読み方について次のように記した。誰も読むことなく打ち捨てられた小文

であるので、自己引用する。

「3 BC一〇〇〇〇年——道德の地質学（大地はおのれを何と心得るか）」は、この書（『千のプラトー』）の通奏低音となる様々な基本概念が丁寧に提示される鍵となるプラトーである。時代を一気に一万年以上遡り、大地の地層化を素材にした地層形成における二重分節（堆積作用と褶曲作用）が、一般的には内容／表現として生命の発生と言語の出現にまで通底することが語られ、さらにモル状／分子状、アレンジメント／抽象機械という（それぞれ地層において／アレンジメントにおいて）機械の作動する体制の差異に関わる対概念が機能し始める。コナン・ドイルの小説中の人物チャレンジャー教授の講演という形態で記されたプラトーだが、基本概念群が纏まって論じられているだけに、精密に読解する必要がある、決して手放してはならない。」

「いかに自然を思考するか？」は、まさしく『千のプラトー』の鍵となる第三プラトー「BC一〇〇〇〇年——道德の地質学（大地はおのれを何と心得るか）」を、この上ないほどに明快に読解する論考である。<sup>(10)</sup> 鍵となるプラトーであるが、実はその読解はかなり難しい。というのも、まず、このプラトーを読んだものはすぐに気づくことだが、このプラトーは、一見すると冗談にしか思われないようなスタイルで記されていて、コナン・ドイルの小説『失われた世界』の登場人物であるチャレンジャー教授の講演報告という形式を取っている。それも、それこそ脱領域的に講演が進むために、大部分の聴衆が席を立ち、最後には誰一人残らなくなってしまう、また、「人間相手に講演をするよりも、ただコンピュータにプログラムを提供することを」夢見るチャレンジャー教授の様子には「どこか動物じみたところが出てくる」のであって、最後には、「分節化された



二重の仮面、手袋や長上衣までもが崩れ落ちて、そこから様々な液体が流れ出して」、解体してしまう、という風な極めて風変わりな講演の報告なのである。実は、このような形式自体が、このプラトーの内容を描くというよく考え抜かれたものであって、言ってみれば、ニーチェの『ツァラツストラ』と同様に、その内容に相応しい形式・文体で記されたものではあるのだが、その文体・形式の故に、楽しくは読めても、そこに提出されている哲学的な概念を理解しようとするとかんがりの努力を必要とするのも事実である。ところが、自己引用した一節に記したように、このプラトーは、二重分節、内容／表現、モル状／分子状、アレンジメント／抽象機械、領土化／脱領土化といった、『千のプラトー』全体において機能する、ドゥルーズ&ガタリによって創出された根本的基礎概念が纏まって提示される、精密な読解を要するこの書の最も重要なプラトーに他ならない。だが、これまでのところ、このプラトーを精密に読解して、『千のプラトー』の根本的基礎概念を明確化する作業は殆ど行われて来なかった。本論考はその作業を見事なまでに遂行したものととして重要な意味を有するものである。

明快な論考であるから、解説を加える必要はないかも知れないが、『千のプラトー』の当該プラトーの内容を知らない読者にとつては理解不能な部分があるかも知れないので、若干の解説を加えておこう。ポイントは三点ある。まず第一に、当該プラトーが、『道徳の地質学』と名づけられていることの意味である。この題名は、言うまでもなく、ニーチェの『道徳の系譜学』に由来する。ニーチェはその書において、人間的な諸価値の起源の探求を系譜学として遂行したが、ドゥルーズ&ガタリは、それを「地質学」として遂行する。それも、メタファーとしてではなく、人間という形象や人間の道徳が、大地の褶曲作用そのものによって、どのように形成されていくかということを、まさしく地質学として考察しようとする。本論考の第一の課題は、この点を明確にすることである。冒頭の導入部がこれを行う。第二に、——これが中心的な課題であるが——地層の内

容と表現への二重分節、モル状／分子状、といった根本的基礎概念が、物理化学的レベル、有機体の形成に  
関わる遺伝学を中心とする生物学的レベル、そして言語活動と道具に関わるような人間的レベルを貫通するよ  
うにしてどのように機能しているか、ということを解明することである。これは、第二節「二重分節」の前半、  
そして、第二節「内容と表現の区別」の課題であるが、特に、第二節は、内容と表現の区別に関して、形相的  
区別・事象的区別・本質的区別という（ドゥルーズ&ガタリ自身が導入している）三つの区別を物理学的・誘  
導的区別・生物学的・形質導入的区別・人間的・翻訳的区別へと明確に対応させることによって、ドゥル  
ーズ&ガタリの思索の内実を明確化している点において貴重である。第三に、ドゥルーズ&ガタリの思考がどこ  
へ向かうのか、というその思考の力線の明確化である。それはまさしく彼らの非人間主義の哲学の意義の解明  
である。大地の地層化によって人間という形象が生まれるにしても、地層化を可能にしている大地は、形を有  
することのない力で満たされているから、固定した有機的な形態を解体するような力が働いているのであつて、  
物理化学的なレベルにおける下位分子的な物質、有機体における非有機的な力と同様に、人間を超え出る非  
人間的な生成変化が存在する以上、人間という形象においては生きていけないような、そして、人間という形  
象においては未だ生きられていない生のありようを解き放つことこそが、ドゥルーズ&ガタリの非人間主義の  
哲学の核心である、ということを浮き彫りにしているのである。この点に関して、肯定的には第一節後半と第  
三節末尾がフォションの名高い論考の美しい一節をも交えながら雄弁に論じるが、他方、そのような非人間主  
義を阻む、つまりは人間を超え出る非人間的な生成変化を阻むような地層化の有する危険というネガの側面  
については、非人間的な諸力を言語活動に閉じ込めてしまふ「意味作用の錯覚」として第三節において論じる。

四百字詰原稿用紙に換算して五〇枚ほどの論考であるから、大地の地層運動から人間という形象の発生まで  
を描くという壮大な試みに対しては、確かに未だラフスケッチの域を出ない、と言うこともできるだろう。ま

た、たとえば、内容／表現という概念がイエルムスレウ由来の概念である以上、このデンマークの言語学者の概念とそれを転用したドウルーズ&ガタリの概念との違いについての説明が必要であろうし、生物学の領域に関する議論に関しては、分子生物学の展開を見据えたよりアップ・トゥ・デイトな議論も必要ではあろう。しかしながら、本論考は、まずはドウルーズ&ガタリの『千のプラトール』の議論の本質的な部分の読解に焦点を絞り、その内容と意義とを明確にしたというだけでも、非人間主義の哲学の未来に関心を有するものにとって極めて貴重な試みなのである。

さらに、本論考は、モンテペロ教授の一連の思索との関わりにおいても大きな意味を持つものである。モンテペロ教授は、一九九四年にメーヌ・ド・ビランに関する大部の博士論文『思惟の分析（*La décomposition de la pensée*）』（Millon）を刊行されたあと、二〇〇三年には、ラヴェッソン・タルド・ニーチェ・ベルクソンを主たる対象に「自然の哲学」としての『もう一つの形而上学』をめぐる好著『もう一つの形而上学 ラヴェッソン・タルド・ニーチェ・ベルクソンについての試論（*L'autre métaphysique. Essai sur Ravaisson, Tarde, Nietzsche et Bergson*）』（Descle de Brouwer）を、昨春秋にはその続刊にあたる『自然と主観性（*Nature et la subjectivité*）』（Millon）を刊行した、現在のフランス哲学において、主にフランス哲学を素材としながら、独自の自然の哲学の構想のもと、生命・身体と主観性に関して考察を深めている中堅どころの哲学者であると言うことができる。『思惟の分解』は、絶対的内在の領野を発見した数少ない哲学者としてメーヌ・ド・ビランを評価するミシエル・アンリのビラン論『哲学と身体現象学』の向こうを張って、むしろビランにドウルーズ的な超越論的経験論——人間的諸能力が、日常的な行使におけるように協和的に働くのではなく、非協和的に働くことによって、その人間的条件を超出していくと考える立場——を読み取って、斬新な印象を与えた。さらに、『もう一つの形而上学』は、タルド、ニーチェ、ベルクソンといったドウルーズが一貫して思索の糧

とした哲学者・思想家を取り上げながら、「自然の全体的な人間化」とともに「人間の全体的な脱人間化」<sup>①</sup>を目指す試みであった。これらの書物から明らかなように、モンテペロ教授の仕事は、フランスのアカデミックな哲学の世界では例外的に、ドゥルーズの思索を正面から受け止め、独自の思索を繰り広げる試みであったが、この論考においては、まさにドゥルーズ（&ガタリ）その人の思索を正面から取り上げて論じている。したがって、本論考は、教授の一連の思索とともに、ドゥルーズ（&ガタリ）の非人間主義の哲学を今日どのように展開して行くか、ということの一つのモデルを提供してくれているのである。<sup>②</sup>

最後に、翻訳掲載の経緯にまつわる事情を簡単に述べて、本稿を閉じることにしたい。ここに掲載した「いかに自然を思考するか？」は、グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」主催で、二〇〇七年一〇月一九日午後一時半から午後四時まで、東京大学本郷キャンパス山上会館において、モンテペロ教授を招いて開催したワークショップ「現代フランス哲学と生命論」における教授の発表原稿の全訳である。私は、死生学研究の一環として、死というよりは生・生命に関する原理的考察を進めるために、現代フランス哲学を主たる素材にした研究会「現代フランス哲学と生命論」を来年度から開催する予定であるが、その予告編といった意図をもって、この分野に関する最適の哲学者であるモンテペロ教授を招聘し、実質的な議論を行うべくワークショップ形式の研究会を開催することを企画したが、教授は、ドゥルーズに関する著作『ドゥルーズ、バラドックスの哲学（*Deleuze, philosophie du paradoxe*）』（Vrin）を執筆中とのことだったので、教授と相談の上、その一部の中から、死生学研究に関係の深い自然に関する章を選んで、講演して頂いた上で、その内容および教授の仕事全体に対して私がコメントを寄せ、それをもとに議論を行った。<sup>③</sup>

予め送付された原稿を一読して或る驚きを感じたのは事実である。というのも、非人間主義的な思考について短いエッセーを書いたことのある私としては、大きな刺激を受けるとともに大きな共鳴を感じたからである。

そこで、一時間半ほどの講演の後、ドゥルーズ哲学総体の解釈に関する論点も含めて三〇分ほどのコメントと議論を行い、さらにその後、本研究科の鶴岡賀雄教授や塚本昌則准教授を含む二〇人程の参加者の皆さんとともに議論を行ったが、的確かつ重要な質問が続出し、ついつい休憩を取ることも忘れて計三時間もの間充実した時間を過ごすことができた。私からは、「生きていけないような、生きられていない生」を人間的な生に与えるということの内実、潜在性／現実性という対概念をもとに形成されているように思われる『差異と反復』のシステムと内容／表現、領土化／脱領土化といった一連の概念群からなる『千のプラトー』のシステムとの間の展開・断絶の有無、芸術における非人間的諸力を解き放つモデルとしての音楽の重要性、という三点について質問を行った。これに対してはそれぞれ、人間的な形象によっては「生きていけないような、生きられていない生」をまさに生きうるように人間的生を変容することの重要性、展開・断絶というよりは、胎生学のモデルに依拠していた『差異と反復』に対して、考察の対象の拡大により、いっそう包括的なシステムが構築されたということ、そして、音楽よりも文学・絵画・映画こそがドゥルーズにとっては重要であった、という回答が寄せられた。また、ドゥルーズの方法論的側面やその言語論の意義づけ、さらにはミシェル・アンリといった同時代の哲学者の思索との関連等々といった参加者の皆さんからの質問に関しては、その上空飛行的ではなく実験的な方法の重要性、構造主義的言語論との対立の重要性、そして、他なるものへの開かれていないアンリ哲学の問題性、などが明快な仕方で論じられた。

非人間主義の哲学そのものの展開やその批判的検討、それもドゥルーズのそればかりではなく、その源泉の一つと考えられる『ヒューマニズム書簡Ⅱヒューマニズムを超えて』に典型的に示されているようなハイデガーのそれに対する批判的検討は別個に本格的になされねばならないから、本稿は、モンテペロ教授の講演を一つの機会原因とする、それに対する露払いの位置を占めるものに過ぎない。そしてまた、死生学研究の中心的

な成果とこのような特異な思考とがどのように切り結ぶのか、ということも今後の課題ということになるが、前節でごく簡単に触れた、生命倫理学やケア倫理学の言説一般における、言わば〈人間主義的な微睡み〉を非人間主義の哲学の側からどのように批判的な仕方で考察するか、或いは、そのような微睡みの有する重要性をこそ捉え返して、非人間主義の哲学のアナーキーな思索の中に潜む問題性をむしろ浮かび上がらせるべきであると考ええるのか等々、その作業は上述の研究会などを通して展開することにした<sup>(14)</sup>。

註

- (1) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Paris, Editions Gallimard, 1966, p. 398 (ミシェル・フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、四〇九頁。なお、以下訳文に関しては適宜変更を加えた。また、強調は全て引用者のものである。)
- (2) Louis Althusser, *Pour Marx*, Paris, Maspero, 1965, p. 236.
- (3) Jacques Lacan, *Ecrits*, Paris, Edition du seuil, 1968, p. 401.
- (4) Jacques Derrida, *Marges de la philosophie*, Paris, Edition de minuit, 1972.
- (5) Luc Ferry & Alain Renaut, *La pensée 68*, Paris, Editions Gallimard, 1985.
- (6) Gilles Deleuze, *Foucault*, Paris, Edition de minuit, 1986, p. 131 (『フーコー』宇野邦一訳、河出文庫、二〇〇七年、一三三—一三四頁)
- (7) *Ibid.*, pp. 139-141 (同書、二四八—二五二頁)
- (8) M. Foucault, *Op.cit.*, p. 398 (前掲書、四〇九頁)
- (9) 私を知る限りで、アラン・バディウと小泉義之のユニークにして深い一連の思索を例外として。Alain Badiou, *L'éthique*, Paris, Hatier, 1993. 小泉義之『生殖の哲学』河出書房新社、二〇〇三年、『病の哲学』ちくま新書、二〇〇六年。

- (10) 但し、モンテペロ教授は、このプラトールを一貫して「道德の地質学」と表記している。
- (11) Pierre Montebello, *L'autre métaphysique. Essai sur Ravaisson, Tardé, Nietzsche et Bergson*, Paris, Desclée de Brouwer, 2003, p. 12.
- (12) なお、最近著『自然と主観性』においては、ピラン・ベルクソン・ニーチェのみならず、前著『もう一つの形而上学』において幾度も言及・参照されていたハンス・ヨナスの思索をも本格的に取り上げながら、教授独自の自然の哲学の構想を、(ピラン以来のフランス哲学の伝統に忠実に) 身体と主観に関するより具体的諸相における分析と自然の哲学に関する方法的考察に焦点を集めながら展開している。
- (13) なお、そのドゥルーズ論は、いずれ全訳が刊行されることになろう。
- (14) また、教授招聘とワークショップ開催にあたって尽力されたグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」の事務の方々、および、当日のそれを含めた準備に尽力された特別研究員諸氏に、この場を借りて深く感謝したい。

(すずき・いずみ 東京大学大学院人文社会系研究科准教授)